



## 伝統的な布地製品「バティック」が テーマの幻想アニメ

翻訳家 リー・リン

先日、メディアの報道を通して、マレーシア人が制作した短編アニメが、世界中の26映画祭で公開され、日本の大手テレビ局が主催する映像フェスティバル「デジコン6アジア」の金賞を含め、幾つもの賞に輝いたことを知りました。その「バティック少女」(Batik Girl)という幻想的なアニメが、11月上旬にやっと「マレーシアデビュー」を果たしたと知り、早速YouTube上に開設された公式チャンネルで見ました。

タイトルの通り、「バティック少女」は模様部分をロウで染色するマレーシアの伝統的な布地製品であるバティックが主題のアニメです。主人公は、東海岸のトレンガヌ州に住んでいる主人公の女の子マス(Mas)です。両親を亡くしたマスは、食欲をなくして全てのことに興味をなくしているところから物語が始まります。そんなマスを彼女のおばあさんが非常に心配しています。

深い悲しみを抱えたままのマスは浜辺を散歩している時、たまたまおばあさんがバティック工房にやって来ました。そこで工房にある完成品のバティック、そしてバティックを描いているおばあさんの姿に心を強く動かされました。おばあさんの勧めで、マスも布地の上に絵を描いてみましたが、初めての体験で失敗してしまい、がっかりして諦めようと思いました。

その後、マスに不思議な出来事が起こります。工房で寝てしまったマスが目覚めると、マスが熱したロウで布地の上に描いた少女の絵が生き物のように動きだし、布地の中の花や木々であふれた森の中を歩き回ったり、チョウの背中に乗って空を飛んだりするのです。そばでその「バティック少女」の大冒険を見ていたマスが、再び筆を取るといつの間にか布地の上に色鮮やかなバティックが完成しました。

それはバティックの魔法なのか、あるいはマスの幻覚なのか、アニメで明確な答えを見つけられません。とにかく布地で躍動する「バティック少女」との出会いが、両親の死という深い悲しみの谷からマスを引き上げてくれたようです。

「バティック少女」はセリフがなく、映像と音楽だけで語られるアニメです。むしろセリフがないからこそ、見る人々がこのアニメの最も伝えたいことに集中できるのでしょう。

あくまで門外漢な私の感想ですが、「バティック少女」の画風はさまざまなバリエーションがあるように感じました。マスやおばあさんなど「現実の世界」の人物がディズニーアニメ風に描かれた一方、バティック工房の設備・道具などは新海誠監督の作品のような緻密さで描かれています。

何より印象に残ったのは、バティック世界を描写した映像です。バティックによく使われるタロの葉、花、浜辺の景色、チョウなどの模様や色を含め、水彩風で透明感のあるアニメーションが「バティック少女」の魅力ではないかと思っています。

アニメ本編の他、メイキングビデオも見ました。共同制作者・台本作者のHeidi Shamsuddin(ヘーディ・シャムスディーン)へのインタビューによると、アニメに登場したバティック工房も浜辺のブランコも、実際にある物を基にして描かれたそうです。いつかトレンガヌ州のクアラ・トレンガヌに行った際に「聖地巡礼」をしてみたいと思います。

アニメ本編とメイキングビデオは、制作チームの「The R&D Studio」のYouTube公式チャンネルで見ることができるので、ぜひご覧ください。